

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和4年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度(評価)	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	伊万里市立松浦小学校		
1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> 児童の主体的な学びを目指して、算教科を中心に校内研究を進め、伝え合う場面において自分の学習スタイルを選択することで自分で意思表示を行なった。自己内対話だけでなく、友だちと考えを交流する他者との対話を少しずつ取り入れることで、考えを伝え合う活動に関して児童の意欲の向上が見られた。 児童の学習に対する意欲が低く、意欲を高めるための教材研究および課題提示の工夫の必要、さらに家庭と協力しながらよりよい家庭学習を見出す必要がある。 計画的に「心の広場」「人権集会」を行うことで相手の気持ちを想像して声をかけたり見守ったりすることができている児童が増えてきた。また、心のアンケートの実施、毎週の職員連絡会による気にかいた児童の情報共有を行うことにより、いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応、再発防止に努めた。担任対応だけでなく、組織として継続して対応する必要がある。特別支援教育については個別の支援計画、教育計画をもとに保護者と連携しながら取り組んでいく必要がある。 体育授業前のランニングや昼休みの外遊びの励行を行った。運動場南側の自然公園でも体を動かしよく遊んでおり、体力がついてきたと考える児童が多く見られるようになった。今年度は縦割り班での活動による長縄大会等を実施したい。 		
2 学校教育目標	よく学び、よく鍛え、心やさしい児童の育成		
3 本年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ○あいさつや返事を自然にできる子ども ○互いに考えを出し合い、高め合おうとする子ども ○自他の人権を守る子ども 		

4 重点取組内容・成果指標				中間評価	5 最終評価				主な担当者				
(1)共通評価項目				中間評価		最終評価		学校関係者評価					
評価項目	重点取組	取組内容	成果指標(数値目標)	進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価		意見や提言			
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力的向上	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師を85%以上にする。	B	・研修会では全国調査の結果を分析し、成果や課題等、明らかにすることができた。本校の学力向上に向けた取り組みを共通理解し、個々の教員が学力向上対策シートに取組目標を設定している。	B	全国・県学習状況調査では児童の実態を把握し、マイプランの設定や共通して取り組む課題を共有し、授業改善に向けて取り組むことができた。成果指標を達成した教師は80%であった。	B	特になし。	研究主任 学力向上対策コーディネーター (千々岩、副島)			
		○基礎的・基本的な内容の定着を図る。 ○自分の考えを広げたり深めたりするための学び合い活動を充実させ、思考・判断・表現力を高める。	○基礎的・基本的な内容の問題(評価テストなど)の正答率を80%以上にする。 ○ペアやグループで話し合う活動では、「友達との考えを聞いて、自分の考えを伝えられなかったか」の質問に肯定的な回答をする児童の割合を80%以上にする。	B	・主体的に学ぶ指導方法の研究を通して、授業改善及び指導力の向上を図る。 ・考えを伝え合い、深い学びへ向かう児童を育成するために、児童の実態や発達段階に応じた協力的な学習活動を設定する。	B	・6年生の全国調査のアンケートでは、話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり広げたりすることができていることに肯定的である児童は95.3%いた。 ・校内研究(算教科)を中心に、児童の解決方法の選択や支援体制の工夫など、児童の実態に合わせながら、協力的な学びに向けての授業改善が行っている。	B	基礎的・基本的な内容の問題(算数評価テスト)の正答率は80%以上は4学年であった。ペアやグループで話し合う活動では、「友達との考えを聞いて、自分の考えを伝えられなかったか」の質問に肯定的な回答をする児童の割合は5つの学年で80%以上であった。児童の実態や発達段階に応じた協力的な学習活動を設定することができた。		B	特になし。	
		○各学年1回以上、自他の人権を守る大切さを学ぶ授業を実施する。 ○児童アンケート「友だちの気持ちを想像して声をかけたり見守ったりすることができたか」の割合を80%以上にする。 ○あいさつ強化月間における調査で目標達成率80%以上にする。	○「人権」仲間「共生」のテーマで全校で3回の人権学習を行った。共通教材を用いた授業は、各学年から実施予定である。 ・夢の広場(人権教室)の年間計画を立案し、全職員で実施する。 ・年間を通して「ありがとうの木」「かがやきの木」を掲示し、感謝する心や思いやりの心を意識付けを行う。 ・年3回あいさつ強化月間を設定し、クラスで目標を立てて取り組むことで、あいさつへの意識づけを行う。	B	・共通教材を用いた全学年での人権学習や人権教室を実施する。 ・夢の広場(人権教室)の年間計画を立案し、全職員で実施する。 ・年間を通して「ありがとうの木」「かがやきの木」を掲示し、感謝する心や思いやりの心を意識付けを行う。 ・年3回あいさつ強化月間を設定し、クラスで目標を立てて取り組むことで、あいさつへの意識づけを行う。	B	・「人権」仲間「共生」のテーマで全校で3回の人権学習を行った。共通教材を用いた授業は、各学年から実施予定である。 ・夢の広場は、全8回を全職員で分担した計画を立案し、高・中学年で実施した。 ・年間を通して「ありがとうの木」「かがやきの木」の取組で感謝する心や思いやりの心を意識するようだったが、個人差や学年差が大きい。 ・学期ごとにクラスであいさつ目標を決めて取り組むことで少しずつあいさつへの意識づけができた。	A	・共通教材を活用したり、人権教室と関連させたりして、各学年、年1回以上自他の人権を守る授業を実施することができた。 ・児童アンケートでは、98%以上の児童が「できた」「どちらかというくらい」と回答し、他者への思いやりの心が育ってきている。 ・年2回の挨拶強化月間を実施した。特に2回目は、児童会活動と連携することで、80%以上の児童が「挨拶が元気にできた」と答え、挨拶への意識付けができた。		A	特になし。	
●心の教育	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○児童全員との個別面談を実施する。 ○児童の様子や対応を共通理解するための職員全体での話し合いの場を定期的に設定する。	○児童全員との個別面談を実施する。 ○児童の様子や対応を共通理解するための職員全体での話し合いの場を定期的に設定する。	B	・「心のアンケート」を実施するとともに、担任が児童と個別面談を行う期間を年間2回設定する。 ・毎週の職員連絡会で、気になる児童についての共通理解を図り、必要に応じてケース会議を開く。	B	・前期に1回「心のアンケート」を実施した。アンケートを基に担任が個別面談を行うことで児童の心の悩みなどを知り、心のケアや問題解決への早期取組を行うことができた。 ・毎週の職員連絡会での気になる子についての共通理解は、全校児童の様子に分かり、職員全体がスムーズに関わることができる助けとなった。	A	・年3回「心のアンケート」を実施した。その結果をもとに年2回全児童との個別面談を実施し、いじめの早期発見、早期対応体制の充実につなげることができた。 ・毎週の職員連絡会で気になる児童について情報交換する時間を設け、共通理解を図ることができた。また、ケース会議を2回行い今後の対応について協議することができた。	A	特になし。	児童生徒支援教員 人権・同和教育担当 生活指導主任 (佐田、嶋田、水町)	
		◎地域人材を生かした体験活動	○コミュニティセンターと協力し、地域人材を生かした学習を年に1回以上行う。 ○児童アンケート「体験活動で自分が得た学びや気づきについて学習することができましたか」の割合を80%以上にする。	B	・地域学習において、ゲストティーチャーを積極的に招く。	B	・5年生の米作りでは、地域の方々から指導を行い、3年生はグリーンセンターとオンラインで交流を図るなど工夫して地域人材を活用できた。その反面、コロナウイルス感染症の流行のため、こちらが計画したように外部からゲストティーチャーを招くことが難しいところがあった。	A	・県会活動やマワリ、チューリップの球根植えなどの活動を通して、他を思いやる心や自然や環境を守る優しい心を育てることができた。 ・5年生は米やサツマモの収穫やそれらを使った料理教室などを、6年生は茶道教室を、それぞれ地域人材を活用することができた。 様々な体験を通して日本の食生活や伝統文化への理解を深めることができた。また、新型コロナウイルス感染症の流行が収まらず、計画通りに外部からゲストティーチャーを招くことが難しく、厳しい状況であった。	A	・まちづくり運営協議会(特に教育文化部会)と連携・協力して地域人材の掘り起こしを統合後を見据えた視点でやってみよう。 ・松浦コミュニティセンターでは、本年度、校外学習として、2年生「町探検」、3年生「地域総合学習」、4年生「馬の頭県土木遺産の現地学習」を行った。今まで知らなかった地域にある史跡等を学習することで興味や理解を深めることができた。今後もコミュニティセンター等町の施設を利用し、地域学習への活用をお願いします。		A
●健康・体づくり	●「運動習慣の改善や定着化」	●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で150分以上の児童生徒80%以上。	●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で150分以上の児童生徒80%以上。	C	・昼休みに外で遊ぶように声掛けをする。 ・運動が好きになった、前より運動をするようになった児童が80%以上を目指す。	C	・今年度の夏も気温が高く、熱中症の予防を優先してしまし、外遊びの声掛けができなかった。 ・委員会活動で、遊び紹介ポスターを作成し、放送で呼びかけ、外遊びを推奨する。 ・マラソントイムや縄跳びタイムなどを通して、外で活動する機会を設ける。	B	・気温が下がり、過ごしやすい気候になった11月下旬に外遊び週間として、1週間外で遊ぶ日を設けた。たくさんの児童が、外で遊ぶことができた。 ・昼休みの最後の10分間を使ってマラソントイムを行い、体力の向上や心肺機能の発達に努めることができた。	B	特になし。	保健主事 養護教諭 (淵上)	
		●「望ましい生活習慣の形成」	●きらきらかあど「朝ごはんを食べる」の好意的評価を95%以上にする。	B	・早寝、早起き、朝ご飯の大切さを、保健だよりを通して呼びかける。手洗い指導や栄養教諭の食育の授業を計画・実施し、より良い生活習慣の確立を図る。	B	・5月のきらきらかあど「朝ごはんを食べる」の好意的評価は96.3%であった。 ・保健だよりや掲示物、給食時間の放送、TTの授業、栄養教諭の招聘等により、基本的な生活習慣や病気の予防について呼びかけた。	B	・10月のきらきらかあど「朝ごはんを食べる」の好意的評価は90.3%、長期休暇後の健康調査での好意的評価は、9月94.0%、1月94.5%であり、児童への指導に加えて保護者への周知を図り、協力を求める必要がある。 ・食育について、栄養教諭を招聘し、朝会での児童対象の講話や保護者対象の講話を計画・実施した。また、生活習慣や病気の予防について、児童参加型の掲示物を作成し、児童が楽しく学べるよう工夫した。また、毎月ほげだよりを配付して保護者への情報共有を図った。	B	特になし。		
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外勤務時間の上限(2時間)を遵守する。	●教育委員会規則に掲げる時間外勤務時間の上限(2時間)を遵守する。	B	・毎週金曜日を定時退勤日とし、17時施錠を原則とする。 ・一人一人が自分の仕事のやり方を見直し、タイムマネジメントを行う。	B	・金曜日に定時退勤できるように、月曜日から優先順位をつけて業務を行うように、毎週職員連絡会で伝達してきた。 ・定時退勤や退勤時刻後の2時間を意識している職員は70%である。	A	・金曜日に定時退勤しようとする職員は85%である。	A	教職員がある程度「ゆとり」をもって学習指導に取り組んでいけるよう、今後も業務改善・働き方改革を推進していきましょう。	A	教頭口
		○学校行事や会議等のスリム化を図る。	○1つ以上の精選及び1つ以上のスリム化を行う。	B	・ICT機器を有効に活用し、時間の短縮を図る。 ・活動を振り返ったり、改善策を練り合ったりして、PDCAサイクルを回す。	B	・学校行事や会議では、ICT機器を有効に活用し、準備や活動などの時間を短縮することができた。 ・活動後は成果や課題を振り返り、次年度へ向けての改善策を図ることができた。	A	・限られた時間で負担のなく作業ができるようにICT機器を積極的に活用し、教育活動のスリム化を推進することができた。 ・活動後は振り返りを行ったり、改善策図ったりして、次年度に向けた方策を考えることができた。	A	特になし。	教務主任口	
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目													
重点取組				中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者			
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)	具体的取組	進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言				
○特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○職員アンケート「年度当初と比べ、特別支援教育に関する専門性が向上したと思う」の割合を80%以上にする。	・特別支援教育に関する研修会を実施 ・ケース会議の開催、職員集会等での情報共有	B	・7月夏季休業中に研修会を招いての研修会を実施した。支援の必要な児童を抽出して、グループに別れ、具体的な支援策の検討を行うことができた。さらに、講師からも支援に際しての助言をいただくことができた。この研修後のアンケートによると、「専門性が向上した」と肯定的に回答した職員は90%だった。 ・ケース会議及び職員集会で支援の必要な児童の共通理解はできているが、担任に任せられている部分が多く、よりよい方策を考えていかなければならない。	B	・ケース会議は、5年生男児の支援について関係職員で今後の取り組みを話し合うことができた。教室で授業を受ける時間もより増え、改善の兆しが見えてきている。また、2年女児についても外部機関と話し合うことができた。本人の気持ちや行動を大切にしながら具体的な手立てを確立してきている。 ・職員集会で支援の必要な児童の共通理解はできている。それらの児童について、これからは担任への声掛けを継続的に行う必要がある。	A	特になし。		特別支援教育 コーディネーター (松尾、中山)		
5 総合評価・次年度への展望	<ul style="list-style-type: none"> 児童の主体的な学びを目指して、算教科を中心に校内研究を進めた。伝え合う場面において対話活動の様々なスタイルの中から選択し、授業を重ねていくうちに児童は対話の方法に慣れ、少しずつ自分から進んで活動する姿が見られるようになってきた。ICT機器が導入されてコミュニケーションの仕方は様々であるので、対話や交流、共有の仕方を広げていくことも大切であると考えている。 心のアンケートの実施、連絡会での気になる児童の情報共有を行い、いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応、再発防止に努めた。また不登校及び不登校傾向の児童についても全職員で共有できた。不登校及び不登校傾向児童や特別な支援を要する児童については、今後もケース会議を開く等組織として対応していく。 2年～4年生において、松浦コミュニティセンターと連携し、地域人材を活用した郷土についての学習を行うことができた。今後は、1・2年生の昔遊び等、地域人材との交流をよりよい形で設定していけるようにしたい。 												

●●●県共通 ○●●学校独自 ○●●志を高める教育